

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

## 飯田高校 杉山昭久先生寄稿 山岳班夏合宿② (8/4~8/9 : 4泊5日)

### 農鳥小屋の「名物父ちゃん」は厳しくも優しかった

塩見岳西峰(3046m) 8:00。一人一人と握手。最初の3000m峰。360度の大展望。ライチョウの親子が頂上の付近で遊んでいる。生徒らは興奮気味。特に生徒の中での紅一点の2年生はカメラに何枚も収めていた。50mほどの先の東峰(3052)に移動。眼下飯田方面を見つつ、記念撮影。飯田高校の先輩である「本多勝一氏」の著書「初めての山」を思い返す。3名のおばさんグループと一緒にいる。北に目を転ずれば、間ノ岳へと続く稜線がくっきりと伸びている。

9:00山頂発。蝙蝠岳との分岐を過ぎ、ここから一気に300mほどを下る。振り返れば先ほどまでいた塩見が素晴らしい。雪投沢上部を通過。雪投沢上部、登山道から200mほど下ったところは、30年ほど前まで、蝙蝠まで足を運ぶ登山者や、三伏峠・間の岳方面からの便利なテッポ場となっていたが、現在は設営禁止となっている。40年ほど前、岡谷南時代、山岳部合宿で仙丈~北岳~間の岳~農鳥岳とつなぎ、その先、大井川原流・池の沢まで下り一泊。そこから雪投沢を詰め蝙蝠岳分岐をへて塩見方面に抜けたことがあった。



アップダウンを繰り返しながら 快適な稜線歩き。途中、見事なまでに広がるミヤマダケブキのお花畑。黄色の花がダケカンバと青い空に映える。右手には農鳥岳。近年、ミヤマダケブキの黄色の花だけが目立つ。これも日本鹿の食害により、他の高山植物が激減。鹿が食べないダケブキのみが残る結果だ。美しいと喜んでばかりいられないのだ。

11:00ようやく北荒川の山頂。周りには、絶滅危惧種であるタカネビランジやイブキジャコウソウがいちめん咲いている。熊ノ平の幕営地まではまだ遠い。すでに、歩き始めて8時間、熊ノ平まではまた灌木の樹林の中を歩くことになる。2457m地点から、遠く小屋の屋根を見ることができるが、なかなか届かない。14:30ようやく幕営地(熊ノ平)着。



生徒もへろへろ。約11時間30分の行動。のどがカラカラ。唾液も出ない。小屋で受付を済ませ、幕営。ウィークデイということもありともあり、登山者はそう多くない。熊ノ平はこのコースの中でも最良のテントサイトだ。冷たい水があらこちらから湧き出ている。1杯のこの湧水のうまいこと。2, 3杯一気に胃袋に流しこんだ。お茶を飲んだのち、生徒らも一端横になってしまえ

ば、動くことができなくなるということで早めの夕食。自分は、久しぶりに飯がのどを通らなかつた。今日の行動が長かつた分、明日からは少し余裕の日程だ。明日は、農鳥小屋幕営地。

(3日目：熊ノ平～西農鳥～農鳥岳) 午前4：15幕営地発。30分ほど一気に登る。天気は上々。森林限界を過ぎ、5分ほどで間ノ岳直登コースと農鳥岳へのトラバースルート分岐(井川越)。振り返れば徐々に塩見岳が小さくなって見える。3年前は農鳥をカット。直接三峰岳(2999)を経由し間ノ岳に向かつた。

農鳥岳は白根三山(北岳・間ノ岳・農鳥岳)の一つではあるが、三伏方面から(あるいは北岳方面から三伏)来ると、なかなか登るチャンスが無い3000m峰である。無理をすれば、このコースから農鳥小屋へ。西農鳥・農鳥岳をピストンし、さらに北岳山荘(幕営地)に行くことが可能ではあるが、今年は、農鳥小屋幕営地で1泊し、余裕をもって北岳方面に向かう計画を立てた。5：30間ノ岳直下のガレ場。眼前に西農鳥・農鳥がそびえ立つ。水場(大井川源流域の一つ)を過ぎ左側に回り込みながら下る。最低鞍部から20分ほどで早川尾根分岐。稜線に出る。出た途端、正面に富士山がどんと構えていた。歓声があがる。小屋までは10分ほど。



(農鳥小屋の父ちゃん)

農鳥小屋の父ちゃんといえば、ロウるさい父ちゃんだと何かと悪く言われる。しかし、ロウるさく言うのは、マナーの悪い登山者に対してで、きちんとマナーを守り、登山の常識の中で行動していれば、普通の優しい父ちゃんだ。高山裏避難小屋の父ちゃんとよく似ている。登山行動の中で、早立ち、早着は昔からよく言われる。ところが最近、午後4時、5時になってようやく到着する登山者が多いとのこと。全く、常識外れの行動だ。午後は天候が崩れる可能性が高い。雷もある。午後、遅くに到着した登山者には、容赦なく叱り飛ばす。



「おめーさんたち、雷に打たれて死にたいのか……。飯は出さねー……。」なんて。

マナーを外した非常識な登山者に限って「もう、2度と農鳥小屋にはとまらねー」なんて悪口を言う者もいるそう。そのような登山者こそ反省すべきだ。

昨年、高山裏で幕営したおり、3時過ぎに到着した単独の登山者が、「これから荒川前岳を越え、荒川小屋まで行きたいが、どうか……。？」と父ちゃんにたずね、叱咤されたがそれでも、向かっていった。それも、雨の中。常識では考えられない非常識な行動だ。

農鳥小屋は父ちゃんが1人で管理、やりくりしている。3匹の黒い大型の愛犬と寝起きを共にしながら。時間の空いているときは、双眼鏡で間ノ岳のてっぺんあたりを覗いている。本当は優しい父ちゃんなんです。